

## Blossom #1-6

星空を表した織物を再解釈し、散った桜の花びらの群れを星空に見立てた作品です。

星にも誕生と消滅が繰り返されており、私たちがみている星は、何十年、何百年前の過去の光です。

散ってしまった花びらも過ぎた時間を感じさせるものではありませんが、また季節が一巡する予兆であります。

天と地を往来することで、壮大な視点から、生成と消滅を繰り返す自然の循環を捉えようとしています。

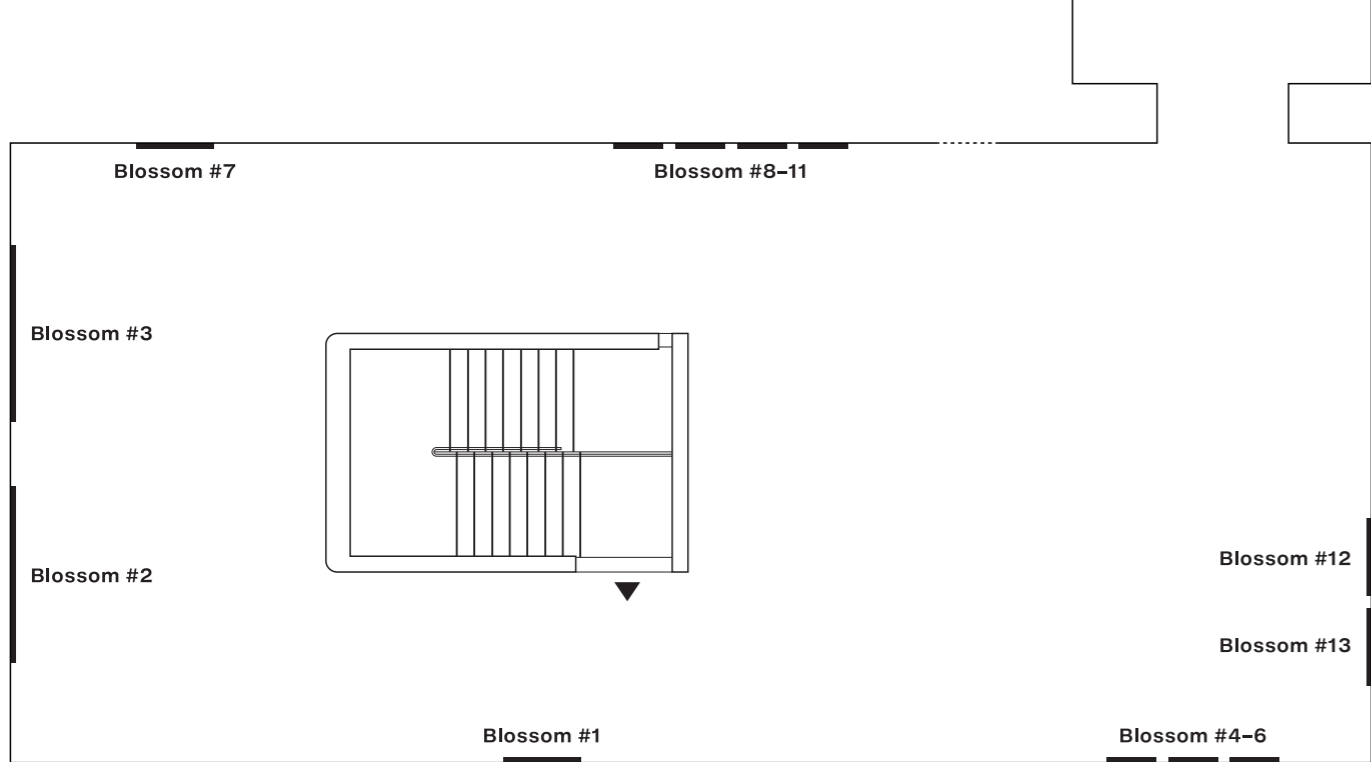
## Blossom #7-14

桜の開花を、季節の移り変わりを体現する媒体として捉えた織物です。

しだれ桜の古木が生き続けてきた約180年間の地球全体の気象データをシミュレーションし、

コンピューター・プログラムによって可視化することで織物の紋様を作り出しています。

樹木の年輪のごとく、古木が生きてきた歳月の地球環境の移り変わりが、紋様として織り込まれた作品です。



### Blossom #1

Size: w1170 × h1170 mm

Material: Silk, Washi, Cotton, Cupro, Polyester

### Blossom #2, #3

Size: w2700 × h1300 mm

Material: Silk, Washi, Cotton, Cupro, Polyester

### Blossom #4, #5, #6

Size: w740 × h740 mm

Material: Silk, Washi, Cotton, Cupro, Polyester

### Blossom #7

Size: w1170 × h1170 mm

Material: Silk, Washi, Cotton, Cupro, Rayon, Polyester

### Blossom #8, #9, #10, #11

Size: w740 × h740 mm

Material: Silk, Washi, Cotton, Cupro, Rayon, Polyester

### Blossom #12, 13

Size: w1170 × h1170 mm

Material: Silk, Washi, Cotton, Cupro, Rayon, Polyester

### Blossom #14

Size: w740 × h740 mm

Material: Silk, Washi, Cotton, Cupro, Rayon, Polyester



主催：株式会社 細尾 リサーチ：原瑠璃彦  
展示協力：井高久美子 ディレクション：細尾真孝

写真：田中恒太郎 宣伝美術：森田明宏

この度、株式会社細尾では、「HOUSE of HOSOO Blossom」と題し、HOUSE of HOSOO が手がけた新作アートピースを公開します。HOUSE of HOSOO とは、京都・西陣地区に位置する細尾の織物制作の拠点であり、職人が1200年に及ぶ西陣織の歴史を継承しつつ、先端的な染織表現の研究を行う創意の場です。「HOUSE of HOSOO Blossom」は、このHOUSE of HOSOO が、染織を探究するなかで生み出した織物の表現技法と、希少な植物を用いた染色によって制作された、一点もののアートピースを公開する展示シリーズです。

Blossom とは、花や開花を意味する言葉です。染色には、植物の花の色をうつしとるような不思議な力があります。樹木の幹や枝、皮で糸を染めると、樹々が開花した時の花盛りの色彩が糸に現れることがあります。これらの花の色は、花びらそのものからは得られず、特に桜染めは、開花前の樹木の皮や枝からしか得られない色彩とされています。また、その色は、染めを行う人の感性によっても異なる色彩となって現れます。花の色とは、まさに複雑な条件と機運が重なり合うことによって得られる特異な色彩なのです。

本展にて公開される作品の色彩は、樹齢およそ180年のしだれ桜との出会いによってもたらされました。福島県二本松市に生息する天然記念物のしだれ桜の老樹を

剪定する折に、大変貴重な大振りの枝をお分けいただきました。このしだれ桜は、平安時代の古戦場跡に生息する2本の樹から成るもので、日本三大桜の一つである名桜「三春滝桜」の孫桜であると言われています。細尾では、2020年に古代染色研究所を設立し、日本において千年以上前に行われていた植物染めの再現研究を行ってきました。その知見を生かし、このしだれ桜の枝を用いて糸染めを行ったところ、180年にわたり生き続けてきた老樹から、鮮やかな艶色が現れました。

桜の花は、日本人にとって春の到来を感じさせる植物であり、俄に人を活気づけるものです。一方で、花が散りゆく儂さから、四季の移り変わりだけでなく、生と死、夢と現実の間を想起させる植物でもあります。HOUSE of HOSOO では、織物として、桜の多面的な側面を表現するべく、2つのコンセプトに基づいた作品を制作しました。

どの季節に咲く花も、自然の中に流れる時間は、一方向に進むのではなく、循環するものであることを教えてくれます。花の色彩を写しとった織物は、花の過去の姿であると同時に、循環における予兆でもあります。「HOUSE of HOSOO Blossom」では、花の色彩を取り入れた作品制作を通して、人と自然の関わりについて哲学的な問いを深めていくとともに、その文化的意味も含めた考察を行いたいと思います。

## HOSOO GALLERY

「地主」という名前が象徴するように、それは清水寺の聖地の地主として、本堂を背後から守護し続けている存在である。この聖地の山や水といった自然のエネルギーを、ひそかに本堂に送っているかのようである。

ある春の日、満開に咲く地主の桜に気を引かれた僧侶は、桜の木のまわりを箒で清める不思議な少年と出会う。

僧侶が少年から清水寺のいわれを聞き、また、境内から見渡される名所の数々を案内されているうちに、折しも月があらわれる。

二人は月あかりに照らされる地主の桜をながめ、その美しさをたたえ、蘇軾の有名な漢詩を唱和する。

<span>しゅんしょういつこく</span>	<span>あたいせんざん</span>	<span>ぜいこう</span>
春宵一刻、直千金。	月に清香、花に影。	

春の夜のひとときは、千金に値するほど、何ものにも替え難い。月がさやけく輝く夜、清らかな香りが漂い、花には月明かりが照り映える。

月下の満開の地主の桜が、二人を陶醉させる。この能《田村》では、その状況が「天も花に酔へりや」と、天までもが桜に酔っているかのようだと言われる。この不思議な少年とは、清水寺を建立した坂上田村麻呂の化身であった。

夜桜。闇夜のなか、白い花びらを無数にたたえた桜の樹は、暗闇のなか佇む神秘的の白だろう。

しかし、その白は、あたかも酒に酔ったかのようにいささか紅潮している。

この夜桜の下、僧はこの世ならぬ者と出会った。

二人を出会わせたのは、この夜桜である。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

桜の花は古来、人を集める求心力に満ちていた。

中世には、花の下連歌と言って、桜の花の下に人々が貴賤を問わず集って連歌を楽しむ会が行われた。清水寺の地主の桜は、その定番スポットだった。

たとえば、『菟玖波集』（1356）には、地主の桜のもとで詠まれた次のような発句が見える。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

ここでは地主の桜を、その白さから清水寺の音羽の滝に喩えている。詩歌においては、種々のものが連想され、結びつけられる。そして、連歌では、前の人の句を引き継いで、次の人が新たに句を付け、その連想を数珠つなぎに重ねてゆく。

なぜその連想の遊戯が、桜の花の下で行われたのか。それは、無数の花びらからなる桜が、人を覚醒させ、種々の連想を呼び起こすからではないか。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

西行もまた、桜を愛した人物であった。

晩年の作とされる次の和歌はあまりに有名である。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

「花」とはやはり桜のことだろう。願うことなら、その下で死にたい。しかも、満月の日あたりに。要するに西行は、月光に照らされる夜桜の下を死に場所にしたいという。西行がそう願うのは、「花の下」自体が死の世界、異界へと通じる境界だからではないか。

彼は、一人で桜を愛でることを好み、桜に人が集まることを嫌った。

西行が嵯峨野の庵室で静かに過ごしていたある日、都から花見の客があらわれる。西行は仕方なく人々を招き入れるが、そのように桜が人々を集めることだけは、桜の科だと愚痴をこぼす。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

すると、老桜から見知らぬ翁が、西行の和歌を繰り返す声が聴こえる。彼は老桜の精だという。桜の精は、桜には罪はないと語る。いつの間にか、西行は夢の世界に陥っていた。桜の精、「夢中の翁」は、そこかこの名高い桜の名所を誂いあげ、静

かに舞を舞う。

そこでは、現実と夢の区別も、また、西行とその老いた夜桜、桜の精の翁との区別もない。桜はあらゆる境界を攪乱するものでもあるらしい。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

宮中で花の宴——つまり桜の花見の宴——が行われた夜、明るく月が輝くなか、酔い心地の光源氏はじっとしていられなく、あてずっぽうに女性のもとへ忍び込もうとする。

そこで折良く源氏は「朧月夜に似るものぞなき」と一人口ずさみながら近づいてくる美しい女性と出会う。源氏はその女性を捉えるも、すぐにほかの者たちが近づいてきたため、仕方なく互いに持つ扇だけを取り替えて立ち去る。

春の月夜に束の間、出会った女性は、誰なのか分からない。頼りはそのとき取り替えた扇だけである。その扇は、桜の三重がさねて、霞んだ月が水に映る様子が描かれている。臙げな夢の逢瀬の名残りの品である。

それからちょうど一月が経ち、今度は藤の花の宴が行われる頃、源氏は「扇取られて」と歌を口ずさみながら、先の女性を探る。すると、几帳の向こうで深くため息をつく女性の気配がある。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

几帳越しに手を捉えた女性の声は、まさしくあのとき扇を取り替えた女性にほかならない。その再会の嬉しさを綴るところで、この巻は終わる。そこから先の展開は書かれない。余韻だけを残した閉め方である。

歌人・藤原俊成が「花宴の巻は殊に艶なるもの也」と述べたように、古来、「花宴」帖は、ことに幽艶な巻とされた。その幽艶さは、桜と酒と月の折り重なりゆえに表出されるものだろう。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

ある夭折の作家は、昭和のはじめ、「桜の樹の下には屍体が埋まっている!」と書き、そこに桜の花が見事に咲くことの所以を見ていた。

あるいは、戦後間もない頃、「桜の森の満開の下」というおそろしい場所で人が気を狂わせる妖しい怪奇小説を書いた作家もいた。

いずれも、桜が、死の世界、狂気の世界に通じるしるしであることを証しているのではないか。そして、それは桜の花の美しさの本質でもある。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

人は無意識に桜の無数の白い花びらに目を向ける。しかし、その花を確と見ることは難しい。視線は無数の花びらに攪乱され、さらっとすべり、ただぼんやりながめることしかできない。それでも人はなぜその無数の白い花びらに目を向けようとするのか。それは、その背後に、たやすく知り得ないものの気配を嗅ぎ取っているからではないか。

自然環境の情報、未来の世界、死後の世界、過去の記憶、夢の世界……。そうした目に見えない情報が、無数の白い花びらの先にざわめいていることを、私たちは知らず知らずのうちに感知しているようである。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

種々の境界のしるしでもあった桜。その桜の木で染めた織物は、新たな境界の幕として、

私たちをどのような未知の世界へ誘ってくれるのだろうか。

## 桜についての覚書 Memorandum on Sakura

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

薄いピンクを帯びた無数の白い花びら。その無数の集積は、昼間は太陽の光を受けて、誰の目にもはっきりと映り、

夜は、月や星のあかり、街灯の光を得て、白くほのかに浮かび上がる。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

山々にある場合は、遠くからながめたとき、そこだけ透いているように見える。夜、上空から見下ろすならば、それは無数の星々の浮かび上がる夜空のようでもある。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

とりわけ、闇夜の無数の白い花びらは、夜であるのに、そこだけが明るく、あたかも白昼夢のような印象を与える。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

桜は暗示の為に重んぜられた。一年の生産の前触れとして重んぜられたのである。花が散ると、前兆が悪いものとして、桜の花でも早く散ってくれるのを迷惑とした。其心持ちが、段々変化して行つて、桜の花が散らない事を欲する努力になつて行くのである。桜の花の散るのが惜しまれたのは其為である。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

桜の花びらのなかには百種もの言葉がこもっているため、おろそかにしてくれるな。これは恋の歌ではあるが、桜の花が無数の暗示に満ちていることを示してくれる。では、桜が何の占いに用いられたかと言うと、それは農作のためであった。「さくら」という名称の語源説は多い。よく知られているのは、穀霊を指す「さ」の依り憑く「座」とするものである。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

田の神を「さがみ」と呼んだり、早乙女、五月、五月雨といった言葉に見られるように、稲作にまつわる言葉は「さ」という語をしばしば頭に頂く。桜の様子を見て、その年の豊作の予兆を見ようとしたのである。

桜の花が散るときには、その花びらとともに疫病神など邪悪なものが飛び散ると信じられた。これを鎮めようとするのが鎮花祭や花鎮めといった祭礼である。今日も紫野・今宮神社などで行われるやすい祭も、その一つである。そこで人々は花傘という華麗に花を飾った風流傘を持って踊るが、その目的は邪悪なものを鎮めることにあった。

今日も私たちは、「開花前線」などといって、毎年、桜がいつ咲くのかを気にかけている。その時期は、気温などの気候の状況に影響される。私たちは現代でもなお、桜を手がかりに、見えないレベルの環境の情報を得ようとしているのではないか。

その時期が年度の切り替わりにあたることも象徴的である。年度の制度は、農業に関わって定められたとも言われる。農業のための占いを行う風習が、現代にも生き残っているようである。私たちは新しい年度を迎えたとき、桜を通して、その一年の予兆を探ろうとしているのではないだろうか。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

「さくら」という名称のなかには、「さく」という語が隠れている。坂、境、崎、岬……。さまざまな境界を指す言葉には「さか」「さき」といった語がしばしば含まれている。桜もまた境界のしるしであるように思われる。

では、それは何の境界のしるしか。

<span></span>	<span></span>	<span></span>
<span></span>	<span></span>	<span></span>

よく知られているように、今日、私たちが各所で触れるソメイヨシノは、江戸時代の終わり頃、江戸・染井の植木屋から売り出され、近代になって全国的に広まった。それまで桜と言えば、ヤマザクラが主流であった。

山桜に対して、庭に植えられる桜は家桜と呼ばれた。かつては山にあったものが、人の住まいをはじめ、神社仏閣などさまざまな場所に桜が植えられるようになった。種々の桜のなかでも、しなやかに枝を垂らすしだれ桜には、特別な意味が担わされていた。

柳田國男は、しだれ桜が、寺や墓といった死に関わる場所に植えられることに注意を向けている。その所以をめぐって柳田は、通常、空を指すはずの樹木の枝葉が、垂れているところに霊異が感じられ、「神霊が樹に依ること、大空を行くものが地上に降り来らんとするには、特に枝の垂れたる樹を択むであらうと想像」している（「しだれ桜の問題」[「信濃桜の話」]）。枝葉を垂らす桜は、何か隠している秘密を語り出すのにためらっているかのようである。

しだれ桜は、糸桜とも呼ばれる。その姿は、束ねられた染糸が干されているようにも、また、何かの織物に織られることを待っているようにも見える。

清水寺本堂の裏には、地主の桜と呼ばれるしだれ桜がある。